

「21世紀COEプログラム」（平成15年度採択）中間評価結果

機関名	長崎大学	拠点番号	F24
申請分野	医学系		
拠点プログラム名称 (英訳名)	熱帯病・新興感染症の地球規模制御戦略拠点 Global Control Strategy of Tropical and Emerging Infectious Diseases		
研究分野及びキーワード	〈研究分野：基礎医学・内科系臨床医学〉(感染症)(熱帯医学)(新興感染症)(ワクチン)(ゲノム創薬)		
専攻等名	熱帯医学研究所・新興感染症病態制御学系専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー名)	青木 克己 教授	他 12名

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成17年4月現在）を抜粋

<p><本拠点がカバーする学問分野について> 熱帯病・新興感染症の研究を進展させ、制御戦略を創生するために、微生物学、臨床医学、免疫学、生化学など医学を中心に、昆虫生態学、人類生態学などを含む学際的研究を行う。</p>
<p><本拠点の目的> 本COEプログラムは、長崎大学の理念『新しい科学の創造と国際貢献』に沿って、1) 熱帯病・新興感染症の中で特に重要な10疾患(マラリア、デング熱、西ナイル熱、住血吸虫症、コレラ、ブドウ球菌病、HIV/AIDS、薬剤耐性感染症、ヒトウイルス感染症、SARS)を防圧するための新しい戦術を開発し、既存の戦術も利用した新戦略を創生し、2) 人材不足が指摘されている感染症専門医師を海外拠点連携病院で養成すると同時に、感染症研究者を養成する研究教育拠点を形成することを目的とする。</p>
<p><計画：当初目的に対する進捗状況等> まず実施計画を年度毎に効率的に達成できるような6つの研究グループ(ウイルス、寄生虫、ブドウ球菌、HIV、真菌、細菌)と3つの運営グループ(大学間協定、国際シンポジウム、広報)を形成した。各研究グループは学際的に進展させる為に、専門が異なる事業分担者により構成されている。 15年度と16年度には、研究基盤整備として、先端的生命科学技術の導入のための研究機器の設置と、海外研究教育拠点との学術協定の締結をおこなった。また平成15年度よりフィリピンとタイで感染症専門医師養成のための臨床研修を開始した。 15年度・16年度の重点研究課題は、1) HIV/AIDS、住血吸虫症、デング熱、ヒトウイルス感染の病態研究、媒介蚊の生態学的研究、2) 住血吸虫症、薬剤耐性菌、SARS、西ナイル熱の診断キット開発、西ナイル熱、マラリア、コレラのワクチン開発、ブドウ球菌治療薬の開発、3) アジア、アフリカにおけるマラリア、デング熱、住血吸虫症の防圧研究、4) 流行予測、予防介入研究に不可欠な数理モデル開発、である。以上すべてに着手し、当初の計画に沿って研究が進行中である。</p>
<p><本拠点の特色> 本組織は、これまでの感染症研究組織の弱点を修正し、基礎研究、製品開発、治療予防介入研究の連携を効率的効果的にするための調整役「情報トランスレーション」を組み込み、これらの研究を学際的アプローチとフィールドワーク、基礎と臨床、先進国と開発途上国の3つの双方向性の研究体制のもとで行う。 また人材不足が指摘されている感染症専門医師の養成を海外の病院で行う。 このように本拠点は開発途上国の研究機関と病院、およびWHO、リハビリ熱帯医学校などの先進国の研究機関と密接な連携の上で運営される。</p>
<p><本拠点のCOEとしての重要性・発展性> 熱帯病・新興感染症の制御戦術・戦略の創生は学際的研究とフィールドワークの双方向性の研究によってはじめて可能となる。欧米、世界機関、途上国の研究教育機関との連携により、本拠点は熱帯病・新興感染症の研究拠点となる。 また、日本で唯一の熱帯病・新興感染症を専門的に学べる教育拠点ともなる。熱帯病・新興感染症情報およびその制御や研究に関するデータベース管理センターにも発展する。</p>
<p><本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果> 1) 基礎研究成果として：HIV/AIDS、マラリア、デング熱、ヒトウイルス感染の病態；媒介蚊の生態；疾病感受性因子の同定、2) 製品開発として：SARSなど診断キット、西ナイル熱などのワクチン開発、ブドウ球菌の治療薬開発、3) 治療予防介入研究成果として：衛生教育や疾病数理モデルの開発による住血吸虫症防圧、などが期待される。 教育成果として、1) 感染症研究の活性化による若手研究者育成、2) 海外拠点病院での感染症専門医師の養成、3) 熱帯医学修士課程の設置による熱帯医学専門職業人育成、が期待される。</p>
<p><本拠点における学術的・社会的意義等> 本拠点プログラムは、新しい戦術と戦略の創生と多くの人材育成により、1996年の日米コンゴジエンガや2000年の沖縄サトウ等によって緊急の対応の必要性が指摘されている地球規模での感染症の制御に貢献できる。 学術的には、これまで個別に行われていた感染症の研究を統括的、学際的に行う新しい研究体制を構築し、感染症制御戦略を創生する新しい感染症の学問領域の創生につながり、今後、予期せぬ未知の感染症の発生や、熱帯病の欧米日本への侵入等へ対抗する学術的手段を提供する。</p>

◇21世紀COEプログラム委員会における評価

<p>(総括評価) 当初計画は順調に実施に移され、現行の努力を継続することによって目的達成が可能と判断される。</p>
<p>(コメント) 熱帯病・新興感染症制圧に関し、基礎的研究から医療現場での実践に至るまでを視点に入れた、広いスタンスを持つ拠点である。海外に積極的に進出し、現場中心の計画の立案とその実践は、特に高く評価できる。 海外で現地の医療従事者が参加しやすいプログラムを展開し、そこで日本の若手研究者も一緒に教育を受けることは大変意義深い。現在までの実績からも、この拠点がユニークで貴重な拠点であることが良く理解できる。</p>